

震災から8年が経過し、当時の自分の記憶すら薄れつつある今、3.11 どころか東日本大震災というワードさえも耳にする機会が徐々に減ってきているのを、日々何気なく感じていた私は、歌津応援プロジェクトを通して被災地の“現状”を知りたい、という思いが強くなりました。実際に現地に足を運ぶことは、正直何かしらの手を使えば誰にでも出来ると思います。大事なのは、そこで自分が何を感じ、考えたのかであると私は思います。そして、それを様々な手段を用いて他者へ発信していくことこそ、私達が参加した本当の意味と言えるのではないのでしょうか。発信と聞くと、SNS ばかりを思い浮かべがちですが、このように礼拝という時間を使って、皆さんに私の想いをお話することも、発信の一つだと思っています。

私は、今回の旅を通して2つの点に気づかされました。

1つ目は、情報の恐ろしさです。年々被災地の現状を知る機会を少なく感じるのも、現地では毎日のように3.11 関連の報道がされているのに比べ、東京では3月に、もしくは3.11 当日にならなければ一切耳にしない、という圧倒的な情報量の差が原因として1つ挙げられるでしょう。中学3年生の時の情報の授業で触れた「メディアリテラシー」でもありましたが、私達が普段見聞きしている情報が、いかに表面的であるかを痛感させられました。また今回地元の方々の思いを聞いたことで、同じ“日本”という島国に住んでおきながらも、実際に起きた大震災をどこか他人事のように思っていた参加前の自分を非常に情けなく感じ、それと同時に“報道”に対して違和感を覚えました。

2つ目に恐ろしいと感じたのは、自然です。死を招いたのも海で、生計を立てるにも海が必要不可欠である、という現状に葛藤しながらも、毎日を懸命に生きている南三陸の人々の姿に胸を打たれ、日々心のどこかで生き残ってしまった自分を責めつづけながら生きていく彼らの辛さや苦しさを想うと、毎日を当たり前で生きられることがどれほど奇跡であるかを改めて実感しました。そして何より、少しの壁が迫ってきただけでも現実から逃げようとしてしまう今の自分の姿が恥ずかしくてたまらなくなりました。

私は日々何事に対してもボランティア精神を大切に過ごしています。だからこそ、今回訪れた事を自己満足で終わらせず、決して“～してあげている”と思っはならないと思います。今回、私達が被災地に足を運び少しの時間ではありましたが、現地の方々と関わったことで、会った方を少しでも笑顔にすることが出来、その時に私自身が感じた“喜び”を常に忘れず、今後の“当たり前”の日々へ生かしていくことが今の私にとっての課題です。